

論 題 創造的思考の過程における連想場面の方法論

-----「強制連想」法の一試案-----

*

森田 富士男

【概要】 創造性開発、教育・訓練のためのモデル（第13回年回研究発表：プログラム、情報システムのセッション）における展開場面3「強制連想」の手法の一つとして、シネクティクスの援用を試みた。

シネクティクスの方法論の実践的メカニズムである擬人的アナロジー、直接的アナロジー、象徴的アナロジーそれに空想的アナロジーの4つの項目を「チェックリスト方式」のチェックリスト項目として設定する。その有効性（「自由連想」による連想のみのケースとの比較において）につき、当学学生を対象に調査・実験を実施し検証した。これが今回の発表内容である。

【キーワード】 情報システム開発、発想支援システム、データベース、自由連想、強制連想

1 背景と目標

コンピュータによる発想支援システム・ツールの開発を前提にしている。創造的思考の本質的部分は、類比思考にあるとの視点から、システム・ツールの開発研究の対象の焦点をそこにおく。この類比思考の過程を方法論としてまとめたもので代表的なものとして「等価変換理論」、「シネクティクス」、「NM法」の3つを取り上げることができる。

本研究では、比較的システム化ツール化になじみやすいと考えられるNM法による展開を骨子に据え、それにシネクティクスの基本的な部分を一部援用し関連づけを試みる。

本研究では、展開モデル（前回発表の「類比思考による創造性開発訓練の展開モデル」図）で示した手法・技法の具体化と検証、それに、各展開場面ごとの有機的結合の方法論の考案を大きな目標として掲げる。当面の目標（今回）は、展開場面3強制連想の効果的方法を探ることである。

本報告は、第1報で当面の目標として設定したテーマの実践報告である。

2 研究（調査・実験）の目的

ブレインストーミング法による自由連想とチェックリスト法を代表とする強制連想には、それぞれ一長一短がある。どちらを活用するかは、原則的には、テーマの性質によるが、研究者（森田）はインストラクターの経験から両者の有機的結合を提言している。チェックリストとしてシネックスを取り入れると効果的との仮説を実証することが目的である。

3 研究（調査・実験）の内容と方法

3.1 展開モデルの対象

前回（第13回年回）発表の「類比思考による創造性開発訓練の展開モデル」では、展開場面で2自由連想と3強制連想とは区分して自由連想を先におき、強制連想を後に位置づけた。今回、ここでは、2と3とは区分しないで、強制連想+自由連想と読み替える。

今回の調査・実験は形式的には展開モデルの2、3であるが、実質的には2と3との有機的結合を念頭においた強制連想+自由連想をターゲットと考える。

展開モデルに基づき研究対象を考えれば、それぞれのステップ毎と全体それにステップ間の方法論をピックアップすることができる。

3.2 研究（調査・実験）の手順と実験対象者

（1） キーワードの設定=今回は、任意に動詞 まわる（まわす）を選定。機能を追及テーマが比

較的に多く、その場合は動詞が適合することが根拠。

- (2) 実験対象者を20人20人の2グループに分ける。=A グループは、動詞 まわる(まわす)の言葉から連想するもの、ことを自由に連想する。この場合、BS法をガイドしその方法に基づき実施する。ただし、今回、実施の方法はグループ単位でなく、個人単位とする。かかる時間は40分～1時間。
- (3) B グループによるチエクリスト方式を主にする強制連想とBS法に基づく自由連想を組み合わせる連想の展開。=シネクティクスの実践的メカニズムである馴質異化(Making The Familiar Strange)の4つのパターン [1] Personal Analgy P A (擬人的類比) [2] Direct Analgy D A (直接的類比) [3] Symblic Analgy S A (象徴的類比) [4] Fantasy Analgy F A (空想的類比)の意味と取組かたを説明する。
- (4) A グループとB グループ双方の連想の結果を、次の仮説確認のための視点により比較検討を行う。
- (5) 実験対象(協力)者は、つくば国際短期大学の学生である。A グループとB グループとの間に意欲や能力など資質に差はない。

3. 3 仮 説 確 認のための主な視 点

- *1 連想(アナロジー)の「量」と「質」の双方について、A グループとB グループの結果を比較する。「量」では、Aグループの方が多く出ていようが、「質」の面では、B グループの方が優れているはずである。「量」は、数、多面的であるのに対して「質」は、多角的であることを指す。視点の移動が「量」の拡大であるのに対して、「質」は、視点の転換を伴う。
- *2 A グループでは、当てはめると直接的類比のものに片寄っていよう。
- *3 B グループで出てきたものは、はたして、各パターンの意味内容の理解のもとにイメージされたものと言えようか。
- *4 シネクティクスの実践的メカニズムの4つのパターンをテーマ(キーワード)のチェック項目として設定し、BS法の活用による自由連想で、はたしてイメージの展開がはかれるか。さらに、このことが、Bグループの結果から期待できるか。

4 結 論(調査・実験の結果=成果)

- 視点*1=いわゆる連想の「量」は、A グループの方がB グループより、予測どうり多い。「質」は、B グループが優れている。本来イメージに正解不正解、適正不適正の断を下すのはふさわしくないが、直接的類比と思われるものが象徴的類比として出てきている。
- 視点*2=予測どうりと言おうか、それ以上と言おうか分類すると直接的類比と言えるものが圧倒的に多い。
- 視点*3=視点*1で指摘したように象徴的類比のものに理解不足(説明不足)がある。
- 視点*4=ある程度は、それが可能。「量」に限りが見られることから大きくは期待できない。

5 研究(調査・実験)の自己評価

- 視点*1、視点*2は事前に予測可能なことと言えるが改めてその事実と傾向の確認により、自由連想+強制連想の方法論の研究・検討に入ることができる。
- 視点*3の理解不足は、実験に入るに際しての説明不足である。=反省点。
- 視点*4に関しては、問題点や課題をより鮮明にするため(そのことは可能なはず)、追加実験、補足実験を行うべきであった。

6 今後の課題

調査・実験の実施過程で気づいたことであるが、調査・実験テーマの意味あいである。キーワードから連想を広げる段階を対象とした。展開モデルで言うバックグラウンド(イメージされたもの、ことの要素・働き・構造の集大成)を探る段階の手段と言う関係、位置づけになる。研究・整備(データベース化など)の焦点はよりここにシフトすべきであろうこと。

今回、シネクティクスのメカニズムをベースに据えた。他に考えられる「意味のネットワーク」「意味素の体系」「現象整理」などをチェック項目として設定して、本研究の要領で検証して見ること。